

独思録：「ア、秋雑感」(11/1)

秋といえば、芸術の秋、読書の秋、実りの秋、食欲の秋……等々、テーマとなる事柄は次々と思ひ浮びます。

太宰治の短編小説集に『津軽通信』というものがあります。疎開先の津軽の生家で書き綴られた、新しい自由な時代を迎えた心の躍動が脈うつ作品で、創作技巧の限りをつくそうと試みた中期の短篇集であると云われています。

その中に、「ア、秋」という小品が載っています。

「本職の詩人ともなれば、いつどんな注文があるか、わからないから、常に詩材の準備をして置くのである。

“秋について”という注文が来れば、よし来た、と“ア”の部の引き出しを開いて、愛、青、赤、アキ、いろいろのノオトがあって、そのうちの、あきの部のノオトを選び出し、落ちついてそのノオトを調べるのである。」

との行から始まります。

独思録では、太宰治の短編小説集に『津軽通信』に影響を受け、各紙のコラムを読んだ後、共通した作品を取り出し、本職のコラムニストと違い、太宰治のように、注文などないから、常に詩材の準備をして置くのではなく、ズボラにも、青空文庫の Web を開き、秋ならば、公開中の作品別インデックスの“ア”の部をクリックし、作品一覧の中から、今回のように、太宰治の「ア、秋」して引用しています。

太宰治の「ア、秋」は、更に

「トンボ。スキトオル。と書いてある。

秋になると、蜻蛉（とんぼ）も、ひ弱く、肉体は死んで、精神だけがふらふら飛んでいる様子を指して言っている言葉らしい。蜻蛉のからだは、秋の日ざしに、透きとおって見える。

秋八夏ノ焼ケ残りサ。と書いてある。焦土である。

夏八、シャンデリヤ。秋八、燈籠。とも書いてある。

トンボ。スキトオル。と書いてある。」

また、

「秋八夏ノ焼ケ残りサ。と書いてある。焦土である。

夏八、シャンデリヤ。秋八、燈籠。とも書いてある。

コスモス、無残。と書いてある。」

さらに、

「秋は、ずるい悪魔だ。夏のうちに全部、身支度をととのえて、せせら笑ってしゃがんでいる。僕くらいの炯眼（けいがん）の詩人になると、それを見破ることができる。家の者が、夏をよるこび海へ行こうか、山へ行こうかなど、はしゃいで言っているのを見ると、ふびんに思う。もう秋が夏と一緒に忍び込んで来ているのに。秋は、根強い曲者（くせもの）である。

怪談ヨロシ。アンマ。モシ、モシ。

マネク、ススキ。アノ裏ニハキット墓地ガアリマス。」

と書いています。

今週の気候は、正に、太宰治が言っているように、秋が夏と一緒に忍び込んで来て、正に根強い曲者であり、この寒暖の差が、新型インフルエンザの流行を助長し、マスコミも「新型インフル、全国規模で流行拡大 1週間の患者100万人超(10/31)」と伝えています。

日本でもやっとワクチンの接種が始まり、やれやれですが、まずは医療従事者、次いで妊婦やぜんそくなどの持病のある人が対象で、果たして、自分の順番はいつ回ってくるのでしょうか。

また、今週は、「マネク、ススキ。アノ裏ニハキット墓地ガアリマス。」の如く、落語家の三遊亭円楽さんが鬼籍入りしました。まだ薄に招かれて墓地へは行きたくありません。

しかし、夏から秋に変わるこの頃、周辺でもお別れの話をよく聞きます。淋しい限りです。



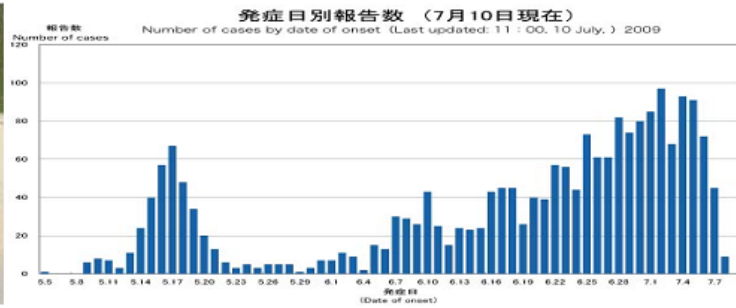
産経：「新型インフル、全国規模で流行拡大 1週間の患者100万人超」(10/31)

国立感染症研究所は30日、25日までの1週間に、全国約5千の定点医療機関から報告されたインフルエンザ患者数は11万8570人、1機関当たり24・62人で、前週(8万4976人、17・65人)より増加したと発表した。患者の大半は新型インフルエンザとみられる。

この1週間に受診した新たな患者数は推計約114万人(前週約83万人)に上り、初めて100万人を上回り、流行が全国規模で本格化しているとみられている。報告数は全都道府県で増加。7月上旬(6日)以降の累計は431万人となった。

一方、新型インフルエンザに感染すると重症化の恐れがある糖尿病などの基礎疾患(持病)がある人や、妊娠中の女性ら一般の人に対するワクチン接種が30日、岐阜、和歌山、山口の各県で始まった。

医療従事者に対しては19日から行われているが、一般への接種は初めて。他の大半の都道府県でも11月に入ってから、順次一般への接種が始まる見通しになっている。



毎日：「三遊亭円楽さん死去：「弟子として断腸の思い」楽太郎さん」(10/31)

29日に76歳で亡くなった落語家の三遊亭円楽さんの弟子で、10年3月に六代目円楽襲名が決まっている三遊亭楽太郎さん(59)は30日、福岡市中央区で始まった「博多・天神落語まつり」に出演中だった。11月1日まで開かれている同まつりのプロデューサーを務める楽太郎さんは、師匠の死の悲しみを胸に秘め、この日も高座を務め上げた。

この日、テレビ番組「笑点」で共演した春風亭昇太さん(49)、林家たい平さん(44)との「三人会」など二つの高座に上がった楽太郎さん。報道陣の前には姿を見せず、楽屋で手書きのコメントを書き上げた。

「只々(ただただ)悲しい」「弟子として断腸の思い」。最後は「お客様、仲間への対応に頑張って仕事をする事を、師匠も望んでいると思います」と締めくくり、笑いを仕事とする落語家の矜持(きょうじ)を見せた。31日、11月1日も予定通り出演する。



< 太宰治 (1909-1948) >

小説家。青森県金木村(現・五所川原市金木町)生まれ。本名は津島修治。東大仏文科中退。

在学中、非合法運動に関係するが、脱落。酒場の女性と鎌倉の小動崎で心中をはかり、ひとり助かる。

1935(昭和10)年、『逆行』が、第1回芥川賞の次席となり、翌年、第一創作集『晩年』を刊行。1939年、井伏鱒二の世話で石原美知子と結婚、平静をえて「富嶽百景」など多くの佳作を書く。

戦後、『斜陽』などで流行作家となるが、『人間失格』を残し山崎富栄と玉川上水で入水



自殺。

作品に『虚構の彷徨』『走れメロス』『東京八景』『老ハイデルベルヒ』『正義と微笑』『富嶽百景』『津軽』『惜別』『パンドラの匣』『冬の花火』『ヴィヨンの妻』など。

春秋：「芸術の秋」(10/30)

その部屋に足を踏み入れた瞬間、生き物の気配を感じた。薄暗い空間のそこそこに、息を潜めて辺りを窺(うかが)う何者かがいた。改装を終えて開館した東京・南青山の根津美術館である。新しい展示室で、太古の美術品が目覚ましつつある。

紀元前の古代中国、殷時代の青銅器の数々が、ほのかな光に浮かび上がり、恐ろしいほどの存在感を放つ。幾千年もの時を土の中で眠り続けたのだろう。鈍い青緑色の金属の塊に命を吹き込んだのは発光ダイオード(LED)を使った照明だった。太陽の輝きから蝋燭(ろうそく)の明かりまで自在に再現する現代日本の技だ。

色彩がない山水画。素朴な茶器。難しい字が並ぶ墨跡……。古美術は派手に自己主張しない。わずかな光線の加減で、国宝級の名作が押し黙るかと思えば、意外な作品が冗舌に語り出すこともある。館長の根津公一さんは「眼力がある1人の愛好家ではなく、99人の常人に魅力を伝える美術館でありたい」という。

一つひとつの展示品ごとに、陰影を確かめながら、LEDの明るさや色合い、角度などの試行錯誤を重ねるそうだ。秘められた美をなんとか取り出して見せようと、照明の操作盤と格闘する裏方の美術館の人々がいる。その営みもまた、時空を超えて物と人をつなぐ、芸術家の仕事であろう。芸術の秋はもう深い。

< 根津公一 (1950-)>

東京都生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。東武百貨店代表取締役社長。根津育英会理事、根津美術館館長、ファッション産業人材育成機構副理事長などを兼務。



東武鉄道の創業一族である根津家の3代目。旧根津財閥の創業者根津嘉一郎(1860-1940)は東武鉄道や南海電気鉄道の前身となる路線の運行など、国内の鉄道敷設や再建事業に関わった「鉄道王」。

根津美術館は、初代根津嘉一郎が蒐集した日本・東洋の古美術品コレクションを保存し、展示するためにつくられた。

旧根津財閥は、交通・住宅・流通・レジャー事業を手掛ける現在の「東武グループ」の源流である。

天声人語：「本を読む」(10/28)

どこで聞いたか読んだか忘れたが、印象深かったので覚えている。アメリカの老富豪があるとき、「全財産をはたいてもかなえたい望みはあるか」と聞かれたそうだ。その答えがよかった。

「大好きな『ハックルベリー・フィンの冒険』をまだ読んでいない状態に戻してほしい」と。富豪は少年時代に夢中で読んだのだろう。愛書中の愛書なのだが、読み返しても、まっさらで読んだあの興奮はよみがえらない。だから、もう一度。想像まじりだが、こんな一冊のある人は幸せだと思う。

活字離れが言われる時代に、「幸せ者」は減りつつあるのかと案じていた。だが本好きな中高生は近年かなり増えているそうだ。調査結果を報じる毎日新聞によれば、学校で読書の時間を設けるといった取り組みが功を奏しているらしい。

読まないのはむしろ大人かもしれない。4人に1人が「月0冊」と小紙の記事にあった。理由は「多忙で時間がない」が3割、「読みたい本がない」が2割。子ども時代の読書体験が、長じての読書量を左右するようである。

中国に「三余(さんよ)」という言葉がある。読書に適した三つの余暇で、冬と夜、雨の日をさす。「三上(さんじょう)」なる言葉もあって、文を練るのにいい場所として馬上、枕上(ちんじょう)、それに廁上(しじょう)を言う。

枕上は寝床だが、馬上は今なら電車の席になろうか。本を読むにも悪くはない。廁上は好きずきとして、時も所もうまく使って本とつき合う時間を探したい。きのうから読書週間。老富豪のようなときめきの「一冊」に、さて巡り合えるだろうか。

<ハックルベリー・フィンの冒険>

マーク・トウェインことサミュエル・クレメンズにより1885年に発表され、最初のグレート・アメリカン・ノベルとして一般には知られている。

アルコール中毒の父親と暮らす、母親のいない怠惰な幼い放浪者ハックが、妻や子供との生き別れ、川下への売却を恐れて逃亡した黒人奴隷のジムと出会い、二人して自由を求めて、オハイオ川の北を横断する事を試みる。

無邪気で幼い主人公と、ミシシッピ川沿いに住む人々や景色の精彩に富む描写、そして主に当時の人種差別への、真摯かつ時には痛烈な確固たる姿勢によって、ハックと友人の逃亡奴隷ジムがミシシッピ川を筏で下る漂流旅行は、全アメリカ文学における脱出と自由の最も永続的なイメージの一つである。

<マーク・トウェイン(1835-1910)>

アメリカの小説家。ミズーリ州出身。本名はサミュエル・ラングホーン・クレメンズ。

トウェインの最も有名な作品である『トム・ソーヤーの冒険』、『ハックルベリー・フィンの冒険』などの登場人物と場所のモデルの殆どは、生まれ育ったミズーリ州ハンニバル

のミシシッピ川沿いの町と云われている。

1949年にノーベル文学賞を受賞したウィリアム・フォークナーは、トウエインが「最初の真のアメリカ人作家であり、我々の全ては彼の相続人である」と記した。

作品に『王子と乞食』『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』『ノータリン・ウィルソンの悲劇』『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』など。



編集手帳：「葡萄畠」(10/29)

明日の生死も知れぬ戦場で、遠い青春の思い出を美しい宝石のように見つめる兵士井上靖の詩「葡萄畠(ぶどうばたけ)」である。友とふたり、翌日の試験を棒に振り、有機化学のノートを枕にして、神と愛について語り合った十数年前の葡萄畠…。

蓬髪(ほうはつ)の下の友の瞳はつぶらで、頬(ほお)は初々しく、その周囲で空気は若葉にそまり、時は音をたてて水のように流れていた。怠惰で放埒(ほうらつ)で、純粹で高貴であった一日！(詩集「北国」)

詩の「私」と同じように作者も、疲弊した心身を美しい思い出で慰めたのかも知れない。慰めきれずに、死をもって充満された時 のなかで叫び出したい日もあっただろう。

井上が1937年(昭和12年)から翌年にかけて、中国に出征した際の従軍日記が見つかった。勤めていた大阪毎日新聞の社員手帳に鉛筆で書かれている。気を強く持たぬと死んで了(しま)ふ 神様！ 一日も早く帰して下さい 等々の記述があった。

その悲痛な叫びを補助線に引いて、青春期を描いた自伝的長編「北の海」(新潮文庫)を読み返すとき、登場人物と場面がまぶしいほどに輝いていた理由に思い当たる。

<井上靖(1907-1991)>

小説家、詩人。北海道旭川町(現・旭川市)生まれ。京都帝大卒業。

1936年(昭和11年)、『サンデー毎日』の懸賞小説で入選(千葉亀雄賞)し、それが縁で毎日新聞大阪本社へ入社、学芸部に配属されるが日中戦争のため召集を受け出征、翌年には病気のため除隊、学芸部へ復帰。

1950年(昭和25年)、『鬪牛』で第22回芥川賞を受賞。翌年、毎日新聞社を退社。以後創作の執筆と取材講演に専念。

作品に『流転』『獵銃』『鬪牛』『黯い潮』『死と恋と波と』『その人の名は云えない』『白い牙』『ある偽作家の生涯』『戦国無頼』『風と雲と砦』『あすなる物語』など。



余録：「子供は神様」(10/28)

「トリック・オア・トリート」は、米国などのハロウィーンでお化けの仮装をした子供たちがお菓子をもらいに近所の家々を回る時にはやし立てる言葉だ。「お菓子をくれなきゃ、いたずらするぞ」という意味である。

もともとケルト人の収穫祭とキリスト教の万聖節の前夜祭が結びつき10月31日の行事となったハロウィーンだ。だが昨今、日本でもこの季節はオレンジと黒のハロウィーンカラーや、ジャックランタンというお化けカボチャが街にあふれる。

とくにお菓子業界はバレンタインデー、クリスマスに続く「第3の商戦」として盛り上げに懸命という。定番人気商品のハロウィーンパッケージなども目立ち、最近2年間でこの時期のお菓子市場は4倍に広がったという声も聞こえてくる。

外国の行事に便乗したお菓子商戦は、今や日本人のお家芸だ。しかし昔の日本にもハロウィーンのような行事はあった。たとえばひな祭りに子供らが集団でお供えの餅やあられをもらい歩く「ヒナアラシ」という風習が行われた地方もある。

「おひな荒らしに参じた」とはその時の子供らのはやし言葉だ。東海地方では「ガンドーチ」というが、「ガンドー」は強盗のことというからすごい。十五夜のお月見に子供らがお供えの団子を盗んで回る「団子盗み」の風習もあった（神崎宣武著『『まつり』の食文化』角川選書）。

お供えを持ち去られた家には福がもたらされる - - 子供は神様と同じだと人々は考えたのだ。地域のぬくもりの中で子供たちが育てられたころの話である。今年のハロウィーン、子供たちにお菓子を買ってあげる時には、そんなやさしいご先祖たちも思い起こしたい。

< 神崎宣武 (1944-) >

民俗学者。岡山県生まれ。武蔵野美術大学卒業。旅の文化研究所所長。郷里の吉備高原では神主でもある。

民俗学は、陶磁器の技術伝播の調査と民具の収集に始まり、食文化に展開。



旅への関心は、フィールドワークの体験と旅先で出会った行商の人たちとのつきあいから。[民族大遊動の時代]の[生態観光][遺産観光][持続可能な観光]を指標に、人はなぜ旅を「食(くら)う」のか、旅は難儀であるがゆえに、旅人をして、「普遍」と「個別」、そして「多様性」「多文化」の発見に誘い、他の土(くに)の光を観ることは、ひとつの文明であり[物見遊山]の文化と文明を考え、国内外の民俗調査・研究に従事。

著書に『盛り場の民俗史』『観光民俗学への旅』『おみやげ 贈答と旅の日本文化』『「うつわ」を食らう 日本人と食事の文化』『江戸に学ぶ「おとな」の粋』『江戸の旅文化』『「まつり」の食文化』など。